

前回、他の文化に強い違和感を覚えるのは、自分にしみついた文化のルールに違反するからで、ある文化が良い、悪いではないと話しました。それを文化相対主義と言うと紹介しました。それでは、私たちはどんな文化も受け入れて、文句を言ってはいけないのでしょうか。先日、新聞でサウジアラビアでは女性は車の運転が許されないという記事を見ましたが、車を運転したいという現地の女性に対して「それが文化なのだから従うべきだ」、「文化に良い、悪いはない」と言うべきなのでしょうか。



文化相対主義の成り立ちを見ると、それは誤りだということがわかります。その昔、生物のみならず、人間の文化にも進化論が当てはめられていました。簡単に言うと、世界の文化はアフリカ→アジア→欧米と進化するという考えです。経済的にも政治的にも力を持っていた欧米は文化の進化論を背景に「優れた我々が劣った民族を支配するのは当然だ」と植民地支配を正当化していきます。このような状況に異を唱えるために打ち出された考えが文化相対主義で、「優劣はない」と弱者が強い者の偏見を打ち破る考えでした。

サウジアラビアでは社会的に女性は弱い立場にあります。彼女たちは強者の男性が生み出した「女性は運転すべきではない」という考えに対抗しているのです。世界を見れば女性が運転する社会もあります。本当に女性は運転すべきではないのか、考え直すべきなのです。文化相対主義は弱者には自分たちを守る武器に、強者には自分の考えを再考させる武器なのです。力の強い者が「文化に善悪はない、だから文化に従え」と言うのはやはり横暴です。

文：県立広島大学 上水流久彦 講師

イラスト：県立広島大学 ロナルド・スチュワート 准教授

2014(平成26)年 広報あきたかた 1月号掲載